

## 第1学年国語科学習指導案

日 時 平成24年11月8日(木) 5校時

学 級 1年3組(男子20名女子13名)計33名

授業者 教諭 佐藤 香代子

- 1 単元名 いにしへの心にふれる 「蓬莱の玉の枝」－「竹取物語」  
(国語1 光村図書)

### 2 単元について

#### (1) 教材について

多くの中学生にとって、本格的に古典と向き合う単元である。小学校では・古文・漢文(音読)・近代史以降の文語調の文章(音読)・古典について解説した文章を学習しており、その学習をふまえての今回の学習となる。

今回学習する「蓬莱の玉の枝－『竹取物語』から」は現存する最古の仮名物語である「竹取物語」を出典としている。「竹取物語」は「かぐや姫」の物語として、幼児の絵本などでも、広く親しまれている作品であるため、興味・関心の面においても生徒たちは抵抗感なく古典の学習ができる教材である。また、本教材「蓬莱の玉の枝」には「竹取物語」の冒頭部分と、くらもちの皇子の冒険談、かぐや姫の昇天後の富士山の由来が原文で掲載され、その間に簡単なあらすじが挿入され作品の全体像がつかめるようになっている。原文は歯切れのよい文体で音読に適しており、話の流れを理解しながら言葉のもつ意味や響きを楽しめる作品となっている。さらに、物語を読み解きながら昔の人のものの見方や考え方に触れることのできるよい教材と考える。現代にも通じる美しいものへのあこがれや、色彩の豊かさ、想像力あふれる表現描写を味わうことのできる作品である。

#### (2) 生徒について

読むことについては、根拠を明らかにして自分の考えを他者に伝えることが苦手な生徒も多い。古典については、小学校で「竹取物語」「平家物語」狂言「柿山伏」などにもふれてきており、古文や漢文は読んで楽しいものであることを実感してきている。中学校に入学してからは月の異名の由来や暗唱などを行い、古典に親しんできている。

また、授業の中にグループ学習など、生徒相互がかかわり合う活動を取り入れることによって、他から学ぶという姿勢がみられるようになり、自分の考えを広げたり深めたりすることができるようになってきている。

#### (3) 指導について

学習指導要領「C読むこと」の指導事項ウ「場面の展開や登場人物などの描写に注意して読み、内容の理解に役立てること」、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」(1)ア文語の決まりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること。」とある。そこで、本単元では「いにしへの人々の思いを読み取り、その思いを朗読で表現する」という言語活動を設定することとした。

朗読を通して登場人物の思いを表現するためには、登場人物の行動に注目させ、その行動の根拠を考えさせることが大切になる。そこで、個→グループ→全体→個という学習過程を取り入れ、一人一人が根拠に基づいてとらえた「いにしへの人々の思い」を交流したり比較したりしながら、自分の考えを広げたり深めたりできるようにしたい。

その上で千年以上たった今でも変わらない人間の心のあり方について、現代作品と古文の共通点を見つけることで現代にも通じる古人の思いを感じさせ、登場人物の思いを朗読の中で表現させたいと考える。

さらに、この学習を第2学年での「伝国」ア「古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること。」への橋渡しとしたいと考えている。

3 単元の指導・評価計画

(1) 単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
① 朗読する文章の内容に関心をもち、工夫して読もうとしている。	① 文章を朗読するために、登場人物の心情や行動、情景描写に注意して読み、内容の理解を深めている。(ウ) ② 文章に表れているものの見方や考え方をとらえ、自分のものの見方や考え方を広げている。(エ)	① 仮名遣いと発音について知り、古文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れている。((1)ア(ア))

(2) 時間ごとの指導と評価の計画

	学習内容	学習目標	評価規準	評価方法
1	「竹取物語」のあらすじをとらえ、冒頭部分を歴史的仮名遣いなどに注意して正確に音読する。	・「竹取物語」のあらすじをとらえ、冒頭部分を歴史的仮名遣いなどの注意して正確に音読することができる。	・「竹取物語」と「かぐや姫」との相違点に気付き、内容をとらえようとしている。 ・古典特有のリズムや歴史的仮名遣いに注意して音読できる。	ノート 観察
2 3 4 本時 2 ／ 3	「くらもちの皇子の架空の冒険談」を、くらもちの皇子の人柄、思いを考えながら、朗読する。	・「くらもちの皇子の架空の冒険談」の部分を正確に音読できる。 ・くらもちの皇子の言動からくらもちの皇子の人柄や思いをとらえることができる。 ・くらもちの皇子の人柄、思いを考えて朗読し、グループで話し合ったり振り返ったりする。	・古典特有のリズムや歴史的仮名遣いに注意して音読をしている。 ・くらもちの皇子の行動をとらえている。 ・くらもちの皇子の言動からくらもちの皇子の人柄や思いをとらえ、かぐや姫への語りを朗読シートに書いている。 ・くらもちの皇子の思いや人柄を考えて、工夫して朗読をしている。	学習シート 観察
5	解説文と原文部分から、場面の様子や翁、かぐや姫、帝の心情を読み取る。	・解説文と原文部分から、場面の様子や翁、かぐや姫、帝の心情を読み取り、考えて朗読することができる。	・場面の様子や翁、かぐや姫、帝の言動から、その心情を考え、朗読の仕方を考えている。	学習シート 観察
6	原文を音読して読み慣れ、古文のリズムや古語に親しみ、人物の心情や行動について考える。	・原文を音読して読み慣れ、古文のリズムや古語に親しみ、人物の心情や行動について考えることができる。 ・千年以上たった今でも変わらない人間の心のあり方について考える。	・作品の中の登場人物の心のあり方を考え文章にまとめている。 ・千年以上たった今でも変わらない人間の心のあり方について考える。	学習シート 観察

4 本時の指導

(1) 目標

「くらもちの皇子」の言動からくらもちの皇子の人柄や思いをとらえる。

(2) 評価規準

「くらもちの皇子」の言動からくらもちの皇子の人柄や思いをとらえ、かぐや姫への語りを朗読シートに書くことができる。

(3) 本時の展開 (評価の○は本時の目標にかかわる評価、●はその他の評価)

段階	学習内容	形態	指導上の工夫及び留意点	評価(観点、方法)
導入 5分	本時の学習部分の音読	一斉	・教師の範読に続いて音読させる。	●大きな声ではっきりを音読している。(観察・発表)
くらもちの皇子の人柄や思いをとらえ、かぐや姫にどのように語ったのか考えよう。				
40分	1 宿題になっていた「くらもちの皇子」の部分のあらすじを発表する。	全体	・宿題についてペアで確認させる。	●宿題のプリントをやってきてるか。(観察)
	2 くらもちの皇子の思いと人柄 ・各自で自分の考えを言葉から巧みな表現を探す。 ・一人学び ・グループでの話し合い	個人	・考える視点を生徒に与える。 くらもちの皇子が、語った中で最高の嘘だということについて ア どこが最高の嘘か イ なぜ、そう思うのか ウ なぜ嘘をついたのか エ くらもちの皇子はどんな人か 上記のことをP140、P142の解説の文章と併せて考えさせる。	●朗読シートに記
	3 くらもちの皇子の思いと人柄についてグループで話し合う。	グループ	・自分の考えと異なる事柄についての根拠について質問するようにさせる。 ・考えを話せない生徒には、グループ内で考えを引き出す質問をさせる。	●自分の考えを話している。(観察)
	4 くらもちの皇子の思いと人柄についてまとめ、発表する。	個人	・くらもちの皇子の思いと人柄を根拠を入れながら5行程度にまとめさせる。	●自分の考えを根拠を明らかにして5行程度でまとめている。
展開 40分	5 くらもちの皇子が、かぐや姫にどのように語ったのか朗読シートに書く。	個人	・朗読の工夫を思い出させる。	○くらもちの皇子の言動からくらもちの皇子の人柄や思いをとらえ、かぐや姫への語りを朗読シートに書いている。
	言語活動：読み取ったことを基に表現の工夫をする。 活動④			
終末 5分	6 全体での一時発表交流	全体	・工夫されているところを考えさせる。	